

大学の世界展開力強化プログラム に参加して
「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代グローバルリーダーの育成」

神戸大学医学部保健学科看護学専攻 4年
河村 知沙



1. はじめに

私は、タイ国のチェンマイ大学において約 4 週間のプログラムに参加した。付属病院での実習、地域での実習、授業への参加、現地の学生とのディスカッションなどを行い、タイ国における医療、看護、文化や人々について知り、学びを深めることができた。

2. プログラム概要

期間：2015/09/07~2015/10/02

場所：チェンマイ大学

3. 活動報告

1) 病院実習

大学病院である、Maharaj Nakorn Chiang Mai Hospital の一般病棟、産婦人科、整形外科、ICU にて見学、実習を行った。チェンマイ大学の学生の実習の見学を行うこともできた。病棟の特徴として、一病室に 6~10 床程度であり、ベッドのカーテンはケアの時以外は基本的には開けられていた。そのため、病室の外からでも患者の様子がすぐに観察することが出来る。物品はディスポーザブルの物は少なく、尿路カテーテルの準備セットなども、滅菌包みに消毒して用意されたものを使用していた。また、手洗い後に手を拭くために洗浄済みの布も用いられていた。このことから、ディスポーザブルの物品は便利ではあるが、逆に、繰り返し使えるものを利用することで、コストの削減やエコにつながっているという視点を持つことが出来た。

また、多くの家族が患者の世話をしに来ており、これは、今までに経験した日本の病院の環境と大きく異なるため驚いた。また、病棟には、家族が基本的に患者の世話をし、緊急時のみ看護師に伝えるような病室もあった。これはタイ国の人々の、家族の世話はするものであるという文化が関係しているようであった。

最も印象に残ったのは、ターミナル期にある患者のケアを行う看護師や学生の姿である。その患者はIV度の褥瘡が臀部にあり、それを実際に目にしたのは初めてで、最初は驚いてしまった。病棟にドレッシング剤などが無いため、看護師と学生はガーゼと消毒液で丁寧に時間をかけて膿を取り除き、創部を清潔にしてガーゼできれいに覆っていた。処置が終わった後の患者の表情は少し苦痛が和らいだように見えた。この場面で、限られた資源のなかで患者のために出来る限りのことをする看護師の姿に胸を打たれ、私もこうありたいと感じた。



図.1 病棟にて

母性看護分野では、分娩室と産褥病棟、母乳外来、産婦人科外来の見学を行った。病棟では、基本的には母子同室であり、母乳育児を特に推進していた。出産前の母親教室には多くの父親が平日にも関わらず参加しており、父親たちの育児に対する積極性やそれが可能になるような文化が伺えた。母乳外来では、多くの母親たちが共に搾乳をしながら語りあっている様子が印象的であった。母親たちがお互いに意見交換や相談をしやすい場であると感じた。地域特有の健康問題について、タイ国では、移民増加によりサラセミアの増加が問題となっており、全ての妊婦に検査を行っている。ダウン症も対象とした簡易なスクリーニングも積極的に導入しようとしているが、この背景には、ダウン症だけでなくサラセミアのスクリーニングの必要性があることが関係しているとのことであった。そこから、現在の医療の動きを理解するためには、その背景にある、地域特有の健康問題に着目する必要性を学んだ。



図.2 分娩室前にて

2) 地域看護

地域看護分野では、Saraphi 区の Yang Nueng にて家庭訪問、健康教育の見学、セラミック工場見学、学校保健サービスの見学を行った。

家庭訪問では、チェンマイ大学の学生に同行し、住民の方にインタビューをする機会もあった。

チェンマイでは、「いつ誰が来ても家族のように迎え入れる文化」があるとのことで、住民の方はとても温かく迎え入れて下さり、心の壁を感じなかった。また、住宅環境も、日本のマンションのように閉ざされておらず、外と中の境界が曖昧な造りになっていた。このような文化や住宅環境から、地域に介入する上で看護師が住民と関係をより形成しやすいと考えられる。訪問した家庭の 60 代の女性は、いくつかの健康問題を抱えており、一日中

家で過ごしているようだった。デイサービスのように高齢者のための生きがい作りや、健康の維持向上のための機会があれば、もっと活動的に毎日を過ごすことができるのではないか、と考えた。特に印象に残ったのは、地域住民の一人であるヘルスポランティアの存在である。ヘルスポランティアは住民の健康状態を把握し、看護師と情報共有して連携を取っていた。地域住民の一人であるからこそ、住民一人一人の健康状態を把握しやすいと考えられるし、関係をすでに形成していることから、外部の人が介入するよりも、より介入しやすいと考えられる。

地域の健康教育では、学生は一方的な方法ではなく、住民とのやり取りをしながら教育を行っていたのが印象的であった。また、実際に料理を作り、試食をしてもらうなど、住民の注意をひきつけるための工夫が多くなされていた。



図.3 健康教育の様子 1



図.4 健康教育の様子 2

産業保健については、セラミック工場での健康維持について知ることができた。工場内のポスターで腰痛を軽減する姿勢やストレッチや、粉塵対策のマスク着用を促していた。日本では、精神障害を原因とする労災認定が増えていることなどから、職場でのストレスチェックの義務化が決定されており、産業保健における精神面の問題は大きい。タイ国で精神疾患を持つ人の割合は日本よりも少ないが、現在の健康対策に加え、この視点も必要なのではないかと考えた。

学校保健について、小学校を訪れて、学生によるスクールヘルスサービスという健康診断を見学した。チェンマイでは医師が不足しているため、学校保健における看護師の役割はとても大きい。タイ国の中でも地域による医師数の格差の問題も知ることが出来た。

この地域看護実習において実際に地域を訪れることで、文化や生活、人々についてもより理解を深めることができたため、とても良い機会であったと思う。



図 5. セラミック工場内



図 6. ストレッチを促すポスター

3) 看護教育

プログラムにおいて実習や授業に参加し、チェンマイ大学の学生と交流することで、タイ国における看護教育についても知ることができた。特に印象的であったのは、全授業の20%は英語で行われていることである。私は、実際に英語で行われるカンファレンスに参加する機会があったが、医療についての言葉が難しく、うまく考えを表現できないこともあった。看護を学ぶだけでなく、将来グローバルな人材として活躍する機会を見据えた教育が行われており、この教育が、より学生の可能性を広げることにつながっていると感じた。

4) 日常生活

チェンマイでは大学内の寮で生活していたため、日常の生活の中で、学生や先生と関わる機会を多くもつことが出来た。先に述べた、チェンマイの人々の「いつ誰が来ても家族のように迎え入れる文化」を実感する場面が多くあり、日常生活すべてにおいてサポートをして下さっていた。実習の合間に学生と学内の食堂で昼食を共にすることが多かったが、その昼食ひとつにおいても、新しい料理や、作法の違いに触れることも出来て、毎日が驚きと発見であった。

大学内ではいくつかのセレモニーにも参加させていただく機会があり、そこでは伝統料理や音楽に触れ、新鮮な体験をすることができた。休日には、学生が様々な場所へ観光に連れて行ってくれ、寺院やマーケット、動物園などを訪れて楽しむことができた。現地の学生と一緒に行くことで、その場所の歴史や文化、しきたり、人々の生活についての話を聞くこともできて、とても有意義であった。



図 7. セレモニーでの Khan Toke 料理



図 8. ワット・チェディ・ルアン

このように、日常生活においても、その国の文化や生活について学ぶことはとても多く、医療との関連について考えるよい機会にもなった。

5) まとめ

プログラム全体を通して学んだことは、その国の医療や看護を理解しようとするとき、その国の文化や国民性、地域の特徴についても知る必要があるということである。

また、実習中やそれ以外の時間での学生や先生との関わりを通して、まず考えを言葉にすることの大切さを学んだ。英語でのコミュニケーションは難しいと感じることが多かったが、物怖じせずに話してみることも大切だと感じた。様々な問題を抱える国々が、お互いに経験や知識を交換し、よりよい方法を模索していくことは大切である。そのための、英語でのコミュニケーション能力の向上の必要性を感じた。



図 9. ウェルカムパーティーに

6) おわりに

このプログラムでの経験は私の視野を大きく広げ、かけがえのないものとなった。今後もこの経験を糧に成長してゆきたいと思う。

このような素晴らしい機会を与えて下り、支えて下さったチェンマイ大学、神戸大学の皆様に感謝します。